



「タイヤとか柵とか、オブジェだったよ」

「その頃流行っていた『絵はもう終わった』式の、ぼくは一種のデマゴギーだと思っているんだが、『批評』の影響かな？」

「大ありだよ、東京のジャーナリズムはすごいと思っていたからな」

「それから二十五年くらいか。 ずい分違ったところにきたわけだな。アメリカとヨーロッパ体験がなくて、日本にそのままいたら、今描いていたような絵を描いた、と思うかい？」

『やっぱり違ったろうな。アメリカでのヒッピー仲間との触れあい、パリの暮し、結局一番もとのところで、自分が自分になっていく過程だったと思うな』

「きみの絵みていると、デュシャンのことを思いだすんだ」

「おれ、デュシャンのこと余り知らないしな、全然考えてなかったよ。」

「でもポンピドオの回顧展はみているだろ？あのなかの最後の作品、孔からのぞくとき、裸の女が大股びらきで、手にランプをもって横たわっているやつさ。あれはデュシャンというよりは、分身のローズ・セラヴィの墓なんだな。孔から覗くわれわれ観客は、「花嫁を裸にする」痴漢というわけだ。われわれがこの痴漢になるときは、あの世にいったデュシャンになり変って、現世の快樂をわれわれも謳歌するわけだ。世俗原理をすっかりとすてて、彼岸で快樂原理を生きる、というのがデュシャンだと思う」。